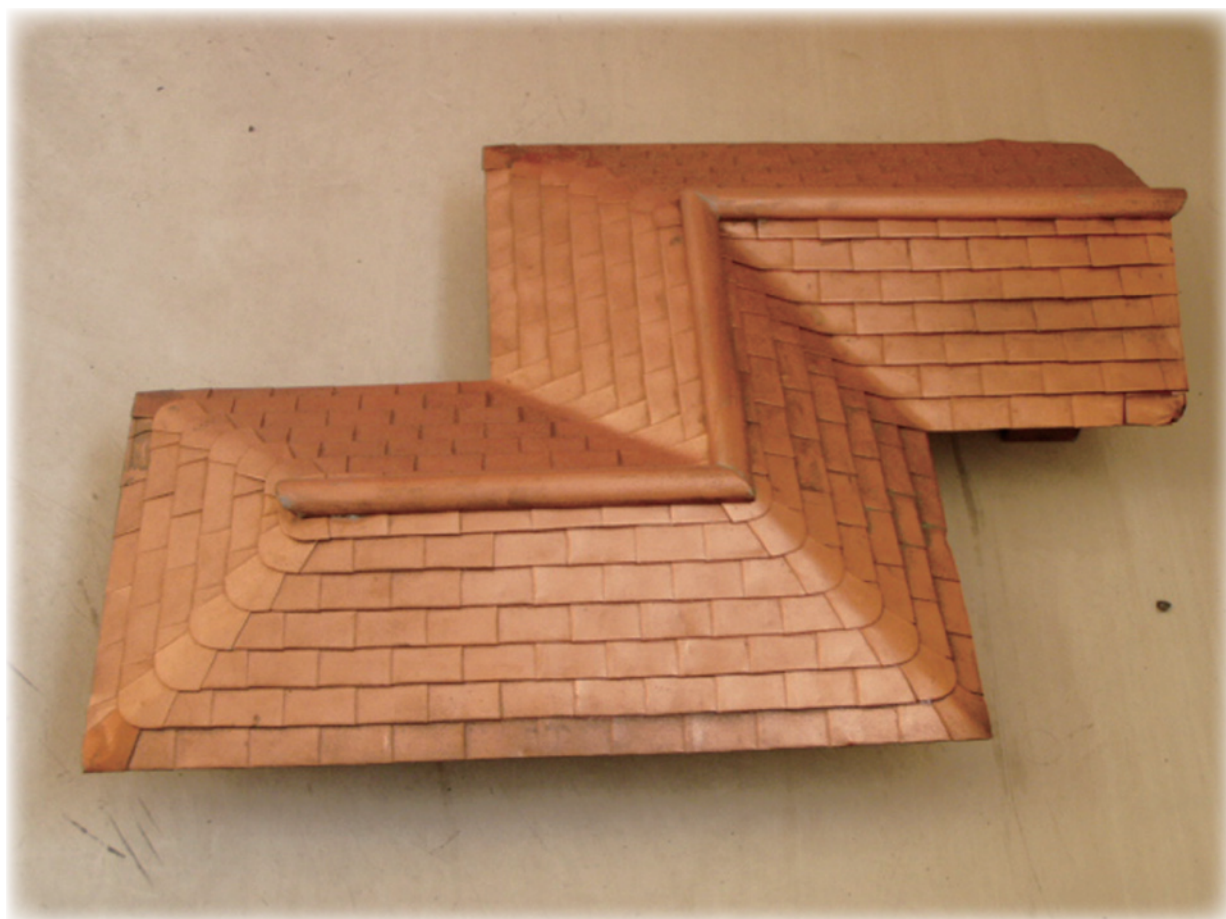


特集

再録

板金いま、むかし

— 鴨下松五郎氏に聞く(下) —



金属屋根の世界は「長尺コイル」の素材が供給されるようになってから大きく変貌しました。しかし、現在の金属屋根は「長尺コイル」以前からの技術や経験に育てられてきましたものです。

※本稿は、平成7年4月号（No.101）から4回に分けて掲載した記事を再録したものです。今月は前号に続き後半を掲載します。

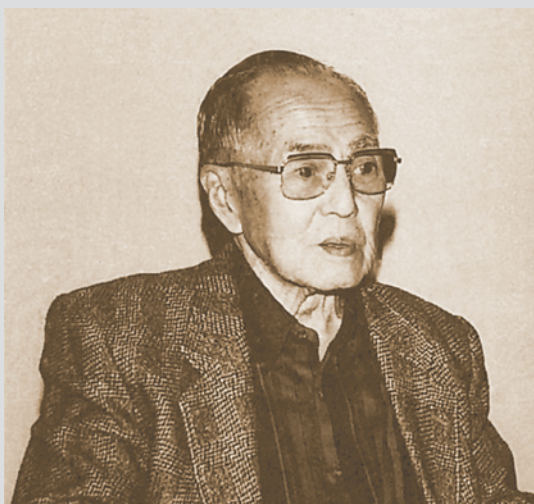
貸し車屋

私は二代目なんです。一人っ子なんで親父の後を継がざるを得ませんでした。親父は二十歳ぐらいでこの仕事に入りましたが、若いじぶんはすごかったみたいです。今で言う暴走族みたいなものでしょうね。日本橋の馬喰町に住んでいたんですが、喧嘩で毎週のように久松警察のお世話になっていたようです。(笑い)。

皇居の「御(み)車寄せ」と言うんでしょうか、玄関の

屋根の仕事を親父がやりに行った時などは、当時のことです。職人一人一人に監視のために役人が付いたそうです。七輪にも役人が一人付いた。結構元気な親父でしたから(笑い)何か気に入らないことでもあったんでしょうね、その七輪に付いた役人を「この野郎屋根に上げてしまおう」と思って、七輪を持って屋根に上がったら、本当に屋根まで付いてきたそうです(笑い)。

その代わりといっちゃあなんですが、子供の躰には厳しかったですね。それこそ箸の上げ降ろしから何

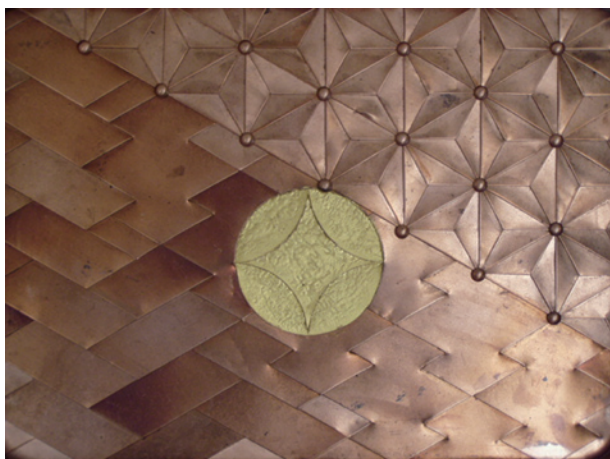


鴨下松五郎氏(故人・平成13年4月14日逝去)
1907年(明治40年)生まれ。
勲六等単光旭日章
現代の名工
日本銅センター章など受章

から……うるさかったですね。すぐ「げんこつ」です。小学校5年の夏休みから、車を引いて仕事に出されました。それでいて何かあると「げんこつ」がすぐに飛んでくる。まあ、それで仕事を覚えたようなもんですが。

当時板金屋が使っていた車というのは、今魚河岸で使っているような荷車です。荷台の下に車輪が付いていて、引っ張る恰好のものです。これを自分で持っている人は少なかったですね。どうするかと言いますと、貸し車屋というのがあって、今で言うレンタカーなんでしょうが、そこに借りに行くわけです。一日10銭ぐらいじゃなかったでしょうか。仕事の当日借りにいったんでは出払っていることもありますから、使う時は必ず前の日に頼みに行きました。

こういう車に提灯を付けて、道具箱、七輪、コールタールの缶、弁当箱なんか乗せて仕事に行きました。勿論乗せていく物も前日に用意しておきます。うちの親父はこの辺もうるさくて、道具箱に入れた「はさみ」などの道具の種類と数を紙に書かされました。何



を持って行ったか分かるようにしていたんでしょうね。

親父の教育

小学生のころだったと思いますが、品川に仕事(東海寺)がありまして馬喰町から車を引いて行かされたことがありました。今のようにアスファルトの道じゃないので大変でしたね。親父から10銭もらって行くんですが、京橋まで来ると屋台の焼き大福屋がありましてね。そこまで来るとお腹が減っちゃって、もらった10銭でよく買いました。その焼き大福も大きさが色々あって、初めは大きいほうがいいと思って買ったら「塩あん」なんです。(笑い)。

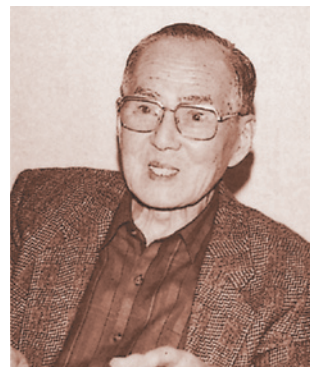
それで4時ぐらいになると「もう帰んな」ということで、また10銭もらって車に空の弁当箱なんか乗せて品川から馬喰町まで引いて帰ってくる。そんな生活でしたね。

うちの親父は現場で3時になると、散らかっている道具をいったん全部集めさせていました。その後仕事をするには、使う道具だけでそこから持っていくわけです。これはたとえ道具を忘れてもその時持っていたものだけですむ、ということです。そういう用心をしていましたね。

それと火にもやかましかったです。「3時すぎたら煙草はすっちゃいけない」とかね。七輪の炭も水をかけたくらいじゃ、ちゃんと消えない。昔の炭は今と違っていい炭でしたから、ちゃんと消さないとまた火がおきてしまう。京橋の永井さんという人が、消したと思って七輪を持って電車に乗ったら、車内で炭がおきて車掌に怒られた(笑い)……そんな話もあるくらいですから。ですから七輪の火を消すときは、水を張ったバケツを用意しておきまして、その中に七輪を突っ込んで帰ってくる、そういう教育を親父はしていましたね。「小僧」さんに対してもね。昔の「小僧」は「腹掛け」を着ていましたが、そこに時計を入れる小さなポケットのようなものが付いています。そこに「これは出しちゃいけないよ」と言って、1円ずつ入れて持たせてました。これは「迷子になったり、うちに帰れなくなった時に、このお金で電車で帰ってくるんだよ」ということです。

電車に乗って仕事に行くこともあるんですが、その時も朝6時までに乗るんです。何故かという、普通は運賃は7銭ですが6時……7時だったかも知れませんが……までに乗ると6銭ですむ。早朝割引きです。ですから、それまでに乗らないと損をするってわけ(笑い)。

この電車に乗るときも6銭なら6銭をバラ銭で「小僧」に持たせるんで



す。当時は電車の中でお金を払ってましたが、財布からお金を出して払うなんてとんでもないという。私も電車の中で財布を出して張った倒されました(笑い)。何でもかと言いますと「バラ銭で持っていれば落としてもそれだけだ」って言うんです。細かいというか、しっかりしているというか(笑い)。もっともそのじぶんは、今と違って皆ポーッとしましたからしょっちゅう財布を落とすんですよ(笑い)。

義理と「げんこつ」

昔の職人の世界は義理堅い世界でしたが、うちの親父は特にその傾向が強かったというか、横のつながりを大事にしましたね。「奉賀帳」なんかも随分やりました。例えば「小田原の誰某がこういうことでちょっと寝てるから、心配してやってくれないか」って声がかかると、よく自分で歩いて回ってました。それで何十円かまとめて、その人に渡してた。親父は若いときに腰が抜けちゃったことがあるんです。脚気のひどいやつだったと聞いてますが、その時に自分に兄弟には一銭の世話にもならず「奉賀帳」で全部済ませたというんです。それが頭にあるから余計、何かあったらお返ししたいってんでやっただけなんです。

若いじぶんの親父は乱暴だったんですが、仕事のほうはしっかりしてましたから、当時の職人としては儲けたほうじゃないですか。14日と晦日になると蔵前に今でもある「町田糸店」の隣にあった貯蔵銀行というのがありまして、そこに私をつれて必ず預金に行っていましたから。なぜ馬喰町から蔵前の銀行まで預けに行ったかという、近所の銀行ですと回りから「職人のくせにお金を預けに行った」と言われちゃうわけ(笑い)。それが嫌だったらしい。

余談になりますが、私が13歳か14歳の頃、その貯蔵銀行が危ないという話になった。浅草の「今半」の

隣にあった十五銀行が潰れたことで取付け騒ぎがおきた。「大変だ」ってんで夜中の2時に親父と二人で行きましたよ。寒い時でしたので「刺し子」を着てね。銀行のほうではお客を安心させようと窓口にお金を積み上げてました。それで夜中の2時でもお金を払ってくれました。みんな殺気立ってましたから、そうでもない「たった殺されちゃう」ような雰囲気でしたね。

そういう感じで仕事に関しては見習う点が親父には多かったんですが、普段はそりゃ人権もへったくりもありませんよ(笑い)。二言目には「げんこつ」でしたから、今なら殺されちゃったんじゃないでしょうね。

その親父も腎臓を悪くして私が19歳の時に寝込んでしまいました。寝込んで口だけは達者でしたが、仕事は出来ない。ですから19の時から一本立ちです。当時うちにはたくさん職人……「おさむらい」……がおりましたが、若いながらも何とか使いこなしましたね。当時の職人は結構大変な人……お酒はよく飲むし、取るものより使うものが多いんですよ、それでいて威張ってる(笑い)……が多かった。そういう人達を使いこなせたというのは結局、普通の人より仕事が出来たということでしょうね。そのじぶんは、何かっていうと「これ(腕)だぞ」「これはどうだ」という感じで、仕事が出来なかったら言うことなんか聞いてくれない世界でしたから。

20歳の時に親父が死んでしまった。ちょうどその時は入営しており台湾(花蓮)にいました。休暇をもらって帰ってきてお申いを済ませたんですが、翌日すぐに戻らなければいけない。この時はうちのこととか心配で戻るのがつらかったですね。でもね。職人や回りの人がうちを守ってくれたんです。仕事が出来るとかなんとか言っても結局、自分だけじゃ駄目なんです。「俺は野中の一本杉だ」って言う人がいます

けど、それは間違いで、野中の一本杉だって大地があるから立っていられます。組合でもなんでも同じですが、みんなが寄って初めてやっていけるんで、自分一人でやっていけると思っちゃいけません。



一坪何枚いるんだい？

当時の屋根の板金工事は今で言う建築金物の業者から私等は受けてましたね。建築金物の業者が屋根の仕事も一緒に受けて、それを板金屋に流してくれる恰好になってました。昔、千住に「おばけ煙突」という4本煙突で有名な建物がありましたが、あれは火力発電所なんです。その火力発電所が千住に移る前に蔵前にありました。蔵前の時は3本煙突だったと思いますが、その屋根の仕事を神田にあった「やまじょう・高田屋」さんが受けて、私等が仕事をやりに行きました。その高田屋さんの人は「あんさく」とみんなに呼ばれてました。「あんさく」って何かって言うと「按摩のさくさん」だと……つまり仕事が見えないというわけです。今なら材料は一坪当たり何枚必要か、ということは仕事を出す方も分かっています。しかし当時は何枚必要かよく分らなかったんです。前にもお話しましたが手間が安かったもんですから、材料を懐に入れちゃってそれで「足りないよ」って言うと、「あんさく」さんはすぐに持ってきてくれたそうです(笑)。それでも儲かったと言ってた。もっともこれは裏を返せば、太腹で上手に人を使ったということでしょうね。職人さんのほうが「あんさく」だったかもしれせん。

もっとも板金屋のほうでも、例えば銅板の屋根です

一坪で10枚か11枚あれば葺けるわけです。役物がいるから1枚ぐらひは余計に見ておきますが……、それを「14枚なければ出来ない」なんて平気で言っていました(笑)。こんなとぼけたことが通った時代でした。

町場、野丁場

少し大きな仕事になりますと、今より義理堅い世界でしたから「あそこでやってる仕事だから応援しよう」ってことで、非常にうまく仕事をこなしてましたね。当時の町場の板金屋は親父と伴、あと職人が「小僧」が一人か二人という規模がほとんどでした。大きいところで親方を入れて5、6人でしたから、協力し合わないちょっと大きな仕事になると出来ません。人間が10人いれば、はっきりいって野丁場です。

当時も町場と野丁場の人達はあまり仲が良くありませんでした(笑)。町場は町場で固まって、野丁場同士で固まって……野丁場の中でも仲のいい人、悪い人がいるって感じでした。町場のほうでは「野丁場なんて奴等は……」って、「かたき」のように思ってたが、今では私のところも野丁場みたいになっちゃいましたがね(笑)。

昔も材料の仕入れ値は町場と野丁場は違っていました。私等は5枚、10枚という単位で買っているんですから、彼らとは当然値段が違った。ですから町場の業者は大きい屋根……100坪あると大変大きな屋根でしたが……そういう仕事には手が出ませんでした。

「清水」さんに出入りしていた関係で、一度大きな倉庫の仕事をしないかと言われて、見積を入れたことがあります。私としては一番安い手間と材料で計算して出したんですが、野丁場のほうから出て来た値段は、私のほうの材料代だけの価格でした。競争にも何なりません。それで「いくら最賃にしてもらっても材料代だけでは出来ません」って、お断りしました。これなんか一つの例ですね。仕事の上手い下手では、はっきりいって町場のほうが上手でしたね。だから町場の人間は野丁場の仕事を見て「こんな仕事をしやがって」なんて言っていました。しかしこれは無理な話しなんです。野丁場は速く仕事をあげようとしてますから。グズグズした仕事は出来ないわけですから。

どんぶり勘定

見積をする時は、材料とか手間を拾っていくんですが、不思議と「どんぶり勘定」と合っちゃうんです。手間、材料、風袋(ふうたい)ようするに経費ですね。この三つがそれぞれ三分の一ずつというのが、「どんぶり勘定」の基本です。残りの一割は、難しい仕事だと手間に食い、材料の良いものを使うと材料に食いという形になりますから、3割は残さなければいけない、という考え方です。親父なんかも3割は抜かなければいけない、と言ってました。

ですから仕事は「どんぶり勘定」でも大きな間違いは起こらないんです。ただ、使い方が「どんぶり勘定」になると、おかしくなっちゃうんです。仕事での計算は「どんぶり」でも合いますが、使い方が……私生活で「どんぶり」をしたりすると、そういう人はだいたい失敗してますね。仕事を取ったとなると前祝いをしちゃう人もいました(笑)。儲かるかどうか分からないうちに前祝いという気分になっちゃって、お金を貰えないうちから、道具を買うとか、飲んじゃったりする。それで材料代が払えなくなったりして、いなくなっちゃった人も結構いました。遊びは誰だって面白いわけ。誰だってやりたいんですが、限度がある。限度を超すとお店を仕舞ってどこかに行ってしまうことになる。「あいつは街遊びは上手いけど、仕事はまずい」なんて言われちゃうわけ(笑)。ですから材料屋さんのほうでも、売掛の枚数を板金屋ごとに細かく決めてました。例えば20枚しか貸してはいけない板金屋が「25枚必要だ」となると、「お前さん気を付けてくれよ」とはっきり言われます。それだけの用心はしますよ。

そういう人でも腕が良ければ「わたり」職人として生きていけました。3日ばかり稼いで、また次にいくという恰好で日本中を渡って歩いている。彼らは腕はいいです。腕が良くなければ使ってもらえませんからね。腕はいいが身持ちは悪い(笑)。本当にどうしょうもない人がいましたね。

うちにも「お隠れ銀次」ってあだ名で呼ばれていた「わたり」職人がいましたが、名前の通りすぐいなくなっちゃうんです。いなくなるだけならいいんですが、ある時「銅金で働いている」と言って相手を信用させておいて、さんざん飲み食いして逃げちゃった。そ

れでまた警察です(笑)。警察に呼び出されて「お前のところは、どうしてそういう悪い奴ばかりいるんだ」……となる。「どうして」と言われても、それこそ困っちゃいます(笑)。今から考えるとすごい職人が多かった、というのが実感ですね。

「お店」へ買い出し



今はなくなっちゃいましたが「お店場(おたなば)」とか「旦那場(だんなば)」という仕事の世界の話しもしておきましょうか。

「お店場」という世界は簡単に説明すると、仕事が無くなるとね「買い出し」といって「お店(たな)」に行って「ここんところ具合が悪いから直さして下さい」と言う。そうすると「そうだね直していいよ」となる。それだけで仕事が貰えるんです。

施主から直に仕事をもらう恰好なんですが、「お店」は板金屋だけでなく畳屋、庭師、経師屋……と色々な職人さんを抱えていた。そういう人達を絶えずそばにおいておく、ということに誇りを持っていたように思えます。出入りの職人には「はんてん」を配る。その「はんてん」を着ていけば、その家の人間のような顔をして「奥」だってどこだって入って行けました。正月前になると、勝手に職人達がやって来て襖を替えたり、畳を替えたりしていく。職人達が自分達で段取りをしてやってしまいます。そういう世界です。

お金もさっきの「どんぶり勘定」でも文句を言わずにきちんと払ってくれる。ただ「どんぶり勘定」だから、その値段が「お店」にとって高かったかという、そうでもなかったと思います。今のうちに間に他の業者が入りませんからね。

そういういい場所があったから、職人も腕によりをかけていいものを作った。本当に仕事が無くなれば、それこそ庭掃除にでも行く。そうすると、その日の日当と三度の御飯が食べられる。そこまで「お店」が面倒を見てくれるわけですから、職人も念入りに仕事をします。

蕎麦二枚

うちの親父なんか、ある「お店」に仕事をしに行っているとするでしょ。お昼になると別の「お店」に御飯のおかずを見に行くんです。おかずがいいと仕事もしていないのに別の「お店」に御飯を食べに行っちゃう(笑い)。私が「仕事もしていないのに」なんて言うのと、「仕事なんてなくてもいいんだよ。おかずは向こうがいいから」って、4、5人自分のところの職人を連れて食べに行く。「お店」のほうも「ご苦労さん」なんて感じで当り前のように食べさせてくれる(笑い)。お店によっては「1」と「6」の日には、必ずお酒を出してくれるところがありました。お勝手に鏡を抜いた樽が置いてあって自由飲めるようになっている。当然のように「ありがとうございます」です(笑い)。

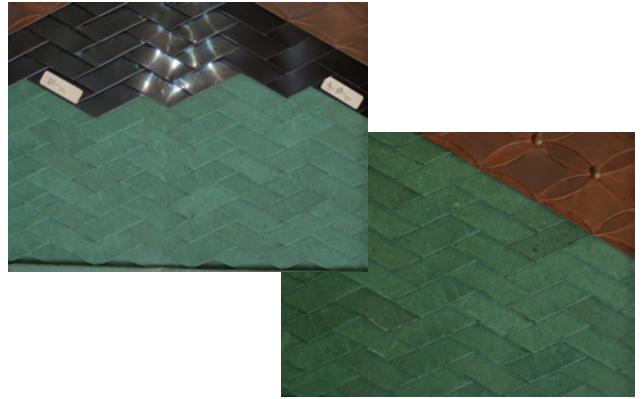
そのかわり風が吹いたとか、近所に火事があったとなると職人はみんな手伝いに行きました。大晦日には「立番」をしてお客の荷物を預かったりして、夜中の2時頃までお勤めをする。

昔は3時になると蕎麦が出されました。どういうわけか蕎麦は必ず2枚でした。ね。煎餅なんか出てくると「四分板(しぶいた)なんか出しやがって」と職人は悪口を言うんです。じゃあ、その蕎麦を食べるかという、お酒を飲む職人は「帰ってからの一杯がまずくなる」って食べない。それでもって出された蕎麦を残して帰るのも嫌なんです。勝手なもんです(笑い)。

でどうなるかという「小僧」に食べさせることになる。「小僧」だってそんなに沢山は食べませんが、「蕎麦は座った分(高さ)だけ食える」なんて言われました。一度親父に「どうして蕎麦は座った分だけ食えるのか」と聞いたんです。そしたら「蕎麦ってのは行儀がいいからスーッと縦に体のなかに入っていくんだ」(笑い)。そんなわけありませんよ。

糸代

「はんてん」を戴く場合も「はんてん」に作ってくれる所と反物でくれる所がありました。反物の場合は必ず「糸代」といって2円とか3円付けてもらいました。「糸代」で付け加えると、芸者さんなんか呼んで遊ぶこともあったんですが、その時に今で言うチップを



ご祝儀として渡すと大きな金額を渡さなければいけませんし、自分だけ出すのは一緒にいる人にも失礼なものとされていました。だいたい職人は口が悪いので、勝手にご祝儀なんか渡すと「あの野郎いい気になって祝儀なんか出して」となりますから。その時には「これはご祝儀ではありませんよ。糸代ですよ」と言って渡したもんです。

私のじぶんには、「はんてん」を戴けるお店が30件ほどありました。1年に2枚くらい一つのお店から戴いてましたから、結構たまってしまいます。そうすると岩木町に「はんてん」の古着を専門に扱っているお店があったので、そこに売りに行きました。「はんてん」は丈夫なものですから、農家なんかの仕事着にもってこいなんて人気がありました。

売る時には、背中の紋と襟地の字を替えたりとか気も使いました。やはりお店から戴いたものをそのまま売るのは気が引けます。もっとも、中には普通ではちょっと分からないところに番号を付けてある「はんてん」もありました。そんなものを知らずに売ってしまうと「鴨下が売った」って分かっちゃう(笑い)。

この「はんてん」が戦後には随分お米に替わりました。私はまだ戦地にいたのですが、残った家族が農家に買い出しに行ってお米を譲ってもらった時に、お金だけでは駄目で「はんてん」を一枚付けないと売って貰えなかったそうです。

忙しいから習えるお稽古ごと

昔の職人は、清元なり新内なり小唄を習うという習慣がありました。宴会になると飲んだり、食ったりするだけではなく、三味線が必ず入りましたから何か唄



わなきゃいけない。それでお稽古にかよう人が多かったし、そういう趣味を持っていた職人さんが沢山おりました。特に左官屋さんに多かったですね。うちの近所に銭湯があったんですが、私の子供の頃、そこに左官屋さんの唄自慢が集まっていた。お湯に入っているとそれは

うるさいんです(笑い)。小唄でした。親父は「左官屋は暇だから」なんて言ってましたが、こういうお稽古ごとは、暇だから習えて、忙しいから習えないというものじゃないんです。忙しいからこそ習えるものです。

私も20歳のころから週に3回、仕事を何とかやり繰りして芳町のお師匠さんのところへ清元を習いに行くようになりました。芸事は礼儀にうるさかった。先輩がいますから挨拶から始まって、稽古の最中は正座です。そのせいか私は未だに胡坐(あぐら)がかけない。正座なら何時間でも平気ですが、胡坐は駄目。自動車なんかのリクライニングも駄目。

それから昭和11年頃まで新内を習いに行っていました。このお師匠さんは、岡本文弥さんという100歳で今でも現役の新内の方の三味線を引いていた人でした。この稽古場は団子坂にありました。

赤いインディアン

団子坂は馬喰町からは遠くて、通うのが大変なんで

す。その為だけではないんですが、免許を取りました。当時は黄色と緑の2種類の免許がありましたが、側車(サイドカー)以外は4輪車も含めて黄色でだいたい乗れました。それで黄色の免許を取ってオートバイに乗るようになりました。当時、神田にいた野丁場の方で赤間さんという人が、赤いインディアンというオートバイで現場回りをしていた。これが恰好良かったんです。憧れましたね(笑い)。私が知っているかぎりでは板金屋でオートバイに乗ったのは赤間さんが初めてだと思います。

当時は国産のオートバイはなくて、そこで外国製のインディアン、ハーレー、トライアンフというオートバイを時間借りして乗っていました。自分でも買いたいんですが、小型のハーレーでも確か四千元くらいしてましたから、なかなか買えない値段でした。赤坂にハーレーの今で言うディーラーがありまして、そこに行っちゃ「ほしいなあ」と思って見てました(笑い)。

そうこうしているうちに宮田自転車店がオートバイを国産で売りに出しました。4気筒のものです。普通のやつが400円。スポーツタイプが420円だったと思います。すぐ買いました(笑い)。スキーの板が6円、手縫いのスキー靴が15円、自転車店が6円、リヤカーは結構高くて12円くらいしてました。その頃のことです。スキーも昭和6年頃から始めました。越後湯沢に行くんですが、上野を11時過ぎの列車に乗って、湯沢に着くのが朝の4時。旅館は当時「湯沢ホテル」くらいしかありませんでした。他には今でいう民宿と朝日新聞の寮があった程度です。その「湯沢ホテル」は普通のお客が泊まると2円、ところが何故かスキー客は1円50銭。安く泊めていただいたから一生懸命スキーをしたかということ、夜は芸者をよんで宴会、昼間はその芸者に玉付けてスキーを教わっているんだから、ろくなスキーじゃなかったですよ(笑い)。

殴りっぱなしよりいい



現役で軍隊に入ったときは台湾に送られたんですが、結構板金の技術を生かせる仕事が軍隊の中にもありました。そのためよく中隊長から「演習行かなくてもいいからハンダ付けしている」と言われました。こっちも演習よりはハンダ付けのほうが、何といっても楽でしたから、喜んでやってました(笑い)。

そのあと昭和12年に一回目の招集を受けて中国に行ったんですが、留守宅に現地の市長さんから感謝状とお金(30元)が送られてきた。これは、現地の子供や病人の世話を随分していたんですよ。それに対して「ありがたい」ってことで、留守宅に感謝状が来たらしいんです。ところが、うちの母親は面食らっちゃった。なにしろ戦争している相手の国から感謝状とお金が送られてくるとは「息子は何してんだろ」ってわけ(笑い)。びっくりして町会長さんのところに相談に行ったら「これは息子さんは人の出来ないことをやってるんだ。こういう人が大勢いないといけないんだよ」と言ってくれたらしいんです。それでもうちの母親は納得しないんです。軍国婆さんだったから「こんな敵の金なんかもらえるか」って、陸軍の執兵

に寄付しちゃった。

私のほうも中国人の面倒をみていると「鴨さんは日本の兵隊よりも中国人のほうが大事なんだね」と言われてました。確かに人のこと殴っという、そんなことやってもしょうがないんだけど、殴りっぱなしよりはいいと思ってやってました。それに私は中国人が好きでしたよ。やはり「大人」ですね、彼らは。

二回目の招集のときは、免許を持っているからと自動車の輜重兵にさせられました。こっちは小隊長でしたが、免許を持っではいるものの、そんなに車のことは知らない。ところが兵隊のほうは運転手だったりしますからそれこそプロです。それである時、上から日産のトラックの新車を3台くれるという話があり、喜んで貰ってきたら「トーシローは困るね」といわれちゃった。何でかという「日本のトラックは3ヶ月も山の中を走ると壊れちゃう。荷車と同じだ」と言うんです。「どうせ貰うなら中古でもフォードがいい」ってわけ。壊れませんからね。それで私、日産の新車を返しに行きました(笑い)。

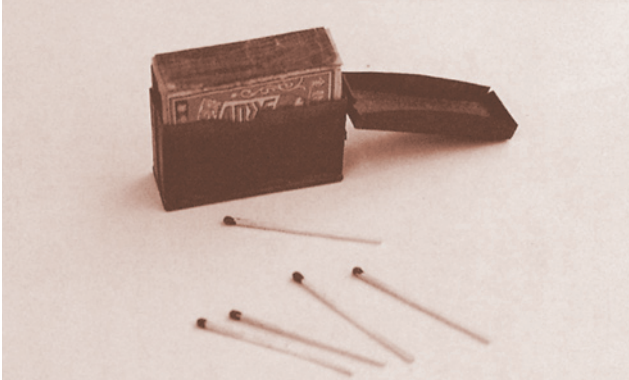
ある時爆撃(砲撃?)で部隊のトラック32台全部のラジエターが抜けてしまった。最初は水を注しながら走ったんですが、いくら走れない。穴をふさがなければ駄目だということになったんですが、肝心の塩酸がない。この時も板金の技術に助けられました。兵隊に松やにを集めさせたんです。それを塩酸の代わりに使ってラジエターを直すことが出来ました。松やにを使うなんて、板金の仕事をしていなかったら思い付きもしなかったでしょうね。

板金屋になってよかった

戦争に負けた後は捕虜です。食料がなくてみんな栄養失調でしたし、塩が手に入らないのにも困りました。お金があれば街で買えるのですが、そのお金がな

い。何とかしてお金を手に入れなければ、どうにもならない感じでした。

そこで、ドラム缶で中華鍋をこさえて街で売ることになりました。現地中華鍋は当時は鋳物でしたので、落としたりすると割れるんです。当時の中国では金物は鋳物製が多かった。蝶番(ちょうつがい)なんかも鋳物でした。そこに目を付けまして街の市場に行って、鋳物の鍋を割って見せて、今度はドラム缶の鍋を落として見せるわけ(笑い)。割れませんから評判になって売れました。売れたのはいいんですが、今度は鋳物の鍋屋さんが怒った。「戦争に負けたくせになんだ」ってことで、取り囲まれて殴られましたよ(笑い)。



捕虜の時に作ったマッチ入れ。
材料はカンパンの入っていた箱(ブリキ板)。

そのほか、ブリキのマッチ入れや蝶番なんかも作って売りました。それだけではなくパンを焼いて売ったり、農作業の手伝いをしたりと部隊の人間が出来ることはなんでもやりました。こういう中で一番助けられたのは、自分の持っている板金の技術でした。板金屋をやってて本当によかったと思いました。

そんな捕虜生活もいよいよ終わり、日本に帰れるようになった時に「そういう(板金)技術を教えるために中国に残ってくれないか」と言われました。私の心も相当動いて残ってもいいかなと思い始めたんですが、ある紡績会社の人が……この人は日本の方ですが…「技術を教えるのはいいことかも知れない。けれど(日本人が)いるといないとでは、いないほうがいいですよ」と。なるほどと思いました。残る気持はありませんでした。